

目 次

まえがき 3

学問について（序にかえて） 7

(一) 最近の学生気質から 9 / (二) 「落ちこ 学問の齎するもの 14 / (六) 批判が深まり

ほし」の戯言（学問とは） 10 / (三) 学生と を生む 15

は 11 / (四) 学問の求めるもの 13 / (五)

「葬歌」から挽歌へのかげはし——「天寿国繡帳」亀背文の語るもの 19

はじめに 19 / (一) 問題の所在 20 / (二) 葬の禁 47 / (六) 「誅」〔所作から言葉へ〕 52 /

「推古・天武時代」の歌の在り様 29 / (三) (七) 他界観の変化——その挽歌への反映 55 /

《死幻想》の諸相 32 / (四) 葬歌・挽歌併用 (八) 「天寿国」の文学への関与 64 / おわり

時代の意義 44 / (五) 「天寿国思想」と「厚 に 67

「孝徳紀」野中川原史満歌を巡って 73

はじめに 73 / 満歌の現在——出典論批判 86 / (五) 中国古典における

74 / 満歌の現在——代作論批判 76 / (三) 文 「諫」について 89 / (六) 中国古典撰取の形

脈の中の歌 78 / (四) 「孝徳紀」に現れてい 跡 91 / おわりに 95

『万葉集』卷二—二七番歌の語るもの……………197

はじめに：97／(一) 『万葉集』卷二—二七歌 しての「吉野」：108／(六) 「吉野」と古人皇

の現在：97／(二) 当歌研究批判：99／(三) 子・大海人皇子、そして仏教：112／おわりに

五句「よき人よく見」批判：101／(四) 上三句 ……117

の新解釈について：103／(五) 出家の場所と

藤原鎌足歌の語るもの……………120

はじめに：120／(一) 当面の問題点：120／(二) しての女の役割：130／(五) 采女とその属性

婚姻の在り様と「未婚」の在り様：121／(三) ……131／(六) 采女その禁制の由来について：

「齋宮」の在り様から：126／(四) 支配の方法と ……134／(七) 歌詞と時代性：137／おわりに：139

『万葉集』卷二—一六二番歌の語るもの……………141

はじめに：141／(一) 『万葉集』卷二—一六二 ……の夢：165／(六) 「習」について：173／(七) 一

番歌の問題点：141／(二) 夢について——「記 ……六二番歌の挽歌性について：174／おわりに

紀」の資料から：144／(三) 夢について——中国 ……180

古典から：155／(四) 漢詩と夢：163／(五) 仏教

『万葉集』卷三—三〇〇番歌の語るもの……………183

はじめに：183／(一) 「手向け」とは何か ……向け」の意義の客観化：194／(四) 「手向け」

184／(二) 旅の諸相と「手向け」：189／(三) 「手 ……の変遷：196／(五) 三〇〇番歌の存在意義…

199／おわりに：199

『万葉集』卷三の富士山歌の語るもの……………203

はじめに：203／(一) 「富士山」を巡るいくつ ……近代の価値観によって捉えられた赤人：217

かの表現から：203／(二) 卷三の富士山歌(特 ……／(五) 最新の方法から：223／(六) ①歌・②歌

に赤人歌に重点をおいて)：207／(三) 『古今集』 ……の試解：224／(七) ①歌・②歌の齎したも…

から『排蘆小船』の間の赤人：213／(四) 明治 ……226／おわりに：230

防人歌の存在理由を問……………235

はじめに：235／(一) 防人の制度と防人歌 ……透と短歌形式の浸透：242／(五) 防人歌収集

236／(二) 東国防人と家持：238／(三) 防人歌 ……の必然性：246／(六) 防人歌の齎したこと、そ

の採歌率と大和化：241／(四) 律令体制の浸 ……の可能性：251／おわりに：252

初出一覧……………254

あとがき……………256

低いところから申し上げ、それに対して一方的に裁断されると言つた意味を残しがちで、そこに感情的な縛れが生じて来ることも理解できないではない。しかしながら、「批判」にはもう一つ大事な意味が在るはずである。それは「価値・正当性・妥当性などを理性をもつて、種々の条件に照らし合わせて判断すること」（『日本語大辞典』）と記される意味である。ただこれについては、「哲学的だ」と言う理由でしばしば敬遠されるのが常だ。しかし、「理性」の行為で、「種々の条件に照らし合わせて判断すること」だと考え、遠ざけるだけでなく、一度意識的に近づけてみてはどうだろうか。なぜなら、学問の世界では「真実」のみが目的なのだから。

「哲学的」に真実を探究しようとするからこそ、いたずらに感情的な縛れの中に止まる愚かさを防げるように思われる。それに批判の対象で在り得ることの意義を理解するならば、レベルの低い、学問の本質を見失つたような在り様はそのレベルまで引き上げて貰うこととしても、「批判」の目を向けて貰えること自体に、限らない連帯の意識を体験できるはずである。

また研究史を人類単位で概観してみると、試行錯誤の連続であつたように思える。こうしたことは個人単位の研究史においても、在つてはならないなどと言うことは在りはしない。確かに研究結果は常に完全を期さなくてはならない。しかしながら、それはあくまでも期待であつて、現実が常にそう在り得るとは限らないのである。研究結果はその研究者主体によつてさえ乗り越えられることもあるのだから、厳しい批判を受けたからといって自信を失つたり、感情的になつたりするのは愚かなこととなるはずである。概ね「批判」をされると、人格も含むすべてが完全否定されたかの思いに至りがちであるが、実は当面する問題についての「批判」でしかないことをわきまえるべきだろう。もつともゼロからのスタートを体験したものにとつても、相変わらず「批判」は厳しい。しかしもつと厳しい「批判」がある。それは自分自身による「批判」である。いずれこの結果もその対象になる。活字になつた自らに対する得も言えぬあの思いこそ、実は最も厳しい「批判」なのかも知れない。しかし、逃げ出したらその対象すら残らない。

「葬歌」から挽歌へのかけはし

——「天寿国繡帳」亀背文の語るもの

はじめに

古代文学を考察しようとする時、現存する限られた資料の中にそれを探らねばならない。仮に文学を言語表現における表現者主体の意識に依存するものと限定して考えたと、『古事記』『日本書紀』等について見るだけでも、そこに認められた内容が様々な在り様を示しているので、それぞれの書のかかえ込んでいる屈折の局面をどの位相から押えて行くかということ巡って、多くの立場が生まれ得る。そこで我々は七世紀に焦点を合わせ、《言語体系》は既に出来あがつていた」との事実の下に、考察を進めて行くこととしたい。《言語体系》と記したが、これを《名辞と意味の關係》に置き直して考えても良い。七世紀、人々は既に言語による観念生活を縦たてにしてきた。だから、言語を巡る心的生活は十分その存在が保証される。

さて、文学の枠を広げて、現代の文学の概念を多少なりとも広げて考えてみると、そこに古代文学の様が透けて見えて来るように思われる。この場合、勿論言語による表現としての文学を考える訳で、当面の課題は古代の精神現象の側面である文学、所謂言語表現の変化とその必然性を見ることを目的とする。ところが時代的制約の関係上、言語表現体としての文献資料にのみ関わつては、従来の研究を越え得ないように思われる。当論文においては、手の届く範囲内で、近接する研究の成果を援用しながら考察を進めるつもりである。その中でも特に重視したいのは、考古学上の知識、「天寿国繡帳亀背文」、それに中国の資料二、三である。

考古学上の発掘事例の一つ一つの解釈については、多分に恣意性が付きまとうように思われるけれども、文献資料